



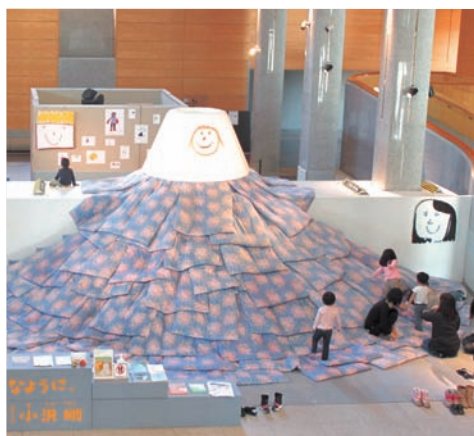
教員は語る

第18回

美術学部先端芸術表現科 准教授

小沢

剛



福島県立美術館「あなたが誰かを好きのように、誰もが誰かを好き」

藝大は変化したか

坂井 まだお茶の水にあったころの附属音楽高校のときから通っています。修士で一時期留学していますが、藝大にはかなり長くお世話になりました。留学先はブリュッセルの王立音楽院とパリのエコール・ノルマルで、二年間休学して論文を書くため藝大に戻ってきました。

藝大の雰囲気はだいぶ変わりましたね。お茶の水にあった藝高が上野に移って来ていますし、私の在学中は旧奏楽堂が修復移転する以前で、まだ立入り禁止の時代でした。私は海外に十八年もいたものですから、上野公園の木も成長していて、こんなに高かったかなといった感慨もあります。でも学生は、皆さん素直でまじめで昔と変わった印象は受けませんね。

小沢 今回着任したのは取手の先端芸術表現科です。学生時代は壁画を専攻した大学院の修士までずっと上野にいました。

僕が藝大にいたころはまだ近代を感じる空気に覆われていた印象です。尖った表現をしても歓迎されないムードでした。ところが今では、先端では現代美術に取り組むのが当然になっていて、それはとてもうれしいことです。ですから美術のとらえ方が、学校全体で随分変わってきているというのはありますね。藝大全体でも美術を教える幅がすごく広がっていると思います。現代美術の先生が一人いるだけで学生も変わるところですが、僕がいたころは「もの派」に属していた榎倉康

二先生がいました。当時としてとても異質で、しかし、すごく重要な先生でした。古きものでとどまるといった考えではなく、今厳然とこの世界の中にある美術の流れを教えてくれたのが大きかった。でもその一方、アカデミックな考えを純粹に守って教えている両方の存在が重要だと思っています。

坂井 美術学部とのつながりでいえば、美術の方からピアニストの手を彫刻にしたいという申し出があって、モデルになったことがあります。

小沢 見てください。

坂井 いえいえ、私は普通の手なんです。しかも、ピアニストとして、あまりいい手じゃないんです。精神的な意味を感じさせるような手を彫りたいとおっしゃって、私の手じゃ全然だめなんですけれども、形を気に入っていただいたらしくて。「好きなように置いてください、あなたの何かがにじみ出してくのを待っている」といったことを言われて彫刻家は違うものだなあと感心したことがあります。

美術と音楽のコラボレート

坂井 美術への関心でいえば、パリにいたときに美術館を随分巡りました。それはもう宝庫でしたから。たとえばフランス印象派の音楽などは、作曲の背景に明らかに絵画がありますので、そういった音楽と美術の関係をテーマに、絵をロビーに展示して、ホールで演奏を聴きましようという企画のサロンコンサートで弾いたこともあります。

セミナーでも、絵を見ていただくことがよ

坂井 千春

音楽学部器楽科（ピアノ）准教授

藝大への期待・抱負・提言



奏楽堂での演奏風景。2012年12月13日

くあります。作曲家自身が意図している背景を説明してから演奏を聴いてもらうとわかりやすいと喜ばれますね。学生がピアノを弾くときも、その曲に美術的、絵画的な背景がある場合には、それを知ることが必須です。それを見た自分の感覚を、媒体を通してどう感じるかで表現が変わってくる。そのフィルタを通して演奏しないと、全く異質な音楽になってしまうので、こういった知識は絶対に必要なと思います。

小沢 現代美術と音楽のコラボレートは最近すごく増えました。僕自身も去年、大分県の別府市で街じゅうを使った「別府現代芸術フェスティバル2012 混浴温泉世界」（二〇一二年十月六日～十二月二日）という展覧会があり、そこで音楽を使った表現活動をやりました。

まず別府の観光名所「別府タワー」を使って、タワーについている「アサヒビル」という六文字のネオンサインを自由に組み替えることを思いついたんです。たとえば「アビル」とか、「サルビア」とか順番を変えて点滅させると、いろいろな言葉が紡ぎ出せる。日本語だけで三六の単語ができて、さらにいろいろな国の言語に置き換えると百個ぐらい単語が出てくるんです。さらにそれを詩にして、安野太郎君という作曲家に作曲してもらい、市民に合唱してもらったんです。「アサヒビル」の「ル」の下にあるテラスに合唱団に並んでいたってコンサートをやったんですが、すごかったですよ。歌に同期して、ネオンサインがパンパンパンかわって、感動的でした。

美術のカテゴリーを超えて、さまざまな人間

が持ち寄る表現を調和させてつくったのです。が、参加した人も満足していました。狭い意味での美術や音楽としてみるとクオリティは低いかもしれないけれども、広い意味で解釈し、見て聴いてもらうものだと思っています。

坂井 地方に行くともた違いですね。私の同級生でも結婚して地方に散らばったりしています。すると皆さん、わざわざ東京に行って音楽を聴かなくても、地方で音楽を頑張ろうという小さな運動がいっぱいあって。音楽ホールとかだけじゃなくて、コンサート企画が小規模でもできる。ヨーロッパの形に近いかなと思いましたね。

昔は大演奏家がいっぱい来たから聴きに行こうとかというのがありました。今では、それだけではなくて、本当に音楽が好きでサロコンサートみたいなものでも聴いて楽しみたいという人が増えたと思います。しかもそういう聴き手のレベルがかなり上がっていると思うのです。

アートとコラボレートするといった自由で親しみやすい企画もよく行なわれ、確実に裾野が広がっていると思います。ヨーロッパでも一流の演奏家のコンサートはもちろん、教会で催される演奏会にも足を運ぶような感じに近い習慣ができてきているのではないのでしょうか。

小沢 クラシックのコンサートは、数えるほどしか行ったことがないのですが、二年ほど前、展覧会でニューオリンズに行ったとき、クラシックのコンサートのチケットをもらって聴きに行ったんです。チャリティコンサートみたいなものでプログラムの半分はジャズ



をアレンジした感じの四重奏でした。

でも僕がやっている現代美術などは、ある程度の説明と前提とする知識がないとわからない部分が多いんですけれども、身体で直接聴くみたいな、誰でも入っていきける直接入っているあの音にすごく感動しました。素直に「音楽、ずるい！ やられた！」と思いましたね。

坂井 生で聴く感動というのは、やっぱりありますよね。演奏の完璧さといったものとは別次元に空気の振動で直接伝わるものというのはやはり大きいです。

小沢 五、六メートルも先にいるのに演奏家の身体の震えが感じられるし、耳元で演奏しているのかと思うぐらい音が伝わってくることに驚きました。

坂井 十二月に行なわれた「藝大シンフォニーオーケストラ第四七回定期公演」で、私はモーツァルトのピアノ協奏曲第二三番を弾きまして、後半はマーラーの交響曲第一番《巨人》だったんです。それがすごくよかったんですよ。自分の演奏が終わって聴いていたのですが、学生たちのレベルが高いうえに、しかも一生懸命に弾いている。もう心を打つものがありますよね。音楽的にもよかったんですけれども、見て、音楽を感じて、その空気が、心情が伝わってくる。百人が全員一丸となって演奏している姿がすばらしかったですね。

新しい音楽環境創造科で扱っている音響のようなこともすごく大事なんですよ。演奏家の能力だけでなく、音響効果によって伝わる印象が全く違いますから。さらに言えば視覚的なホールの色であるとか、お客さんは

それを一括して楽しみにしていってほしい。だからこういう科ができたというのは、すごくいいことだと思います。

子供の心に何か与えられれば

小沢 福島の美術館で三年ぐらい前に展覧会をやったとき、中学校や小学校でも出張イベントをやったんです。そういうつながりがあったから、震災後に福島に暮らす人たちのことがとても気になって、自分に何ができるのかすごく悩んでいたんです。そこで子供たちにフォーカスを絞り、美術館を遊び場にできるような、作品があつたことを思い出しました。

《あなたが誰かを好きのように、誰もが誰かを好き》という作品で、百枚もの布団を重ねた巨大な布団山です。頂上にはカードに自分の好きな人の顔を描いて、世界の見知らぬ誰かに届けるためのポストがあります。参加した子供たちへも、世界の誰かが描いた好きな人の顔のポストカードがプレゼントされます。福島の子供たちに楽しんでもらおうと、昨年クラウドファンディングによって資金を募り福島へと巡回することができました。そういう形で子供の心に何か与えられればな、というぐらいしかできないんですけれどもね。

坂井 映像を見せていただいたのですが、女の子たちが本当にうれしそうに滑っている。うちの子もあれは喜ぶだろうなと思いました。温かくて、やわらかくて、子供たちは好きなんですよ。

小沢 やはり子供たちは未来そのもののじゃないですか。子供たちは何十年か後には大人に

なり、日本を引っ張っていく人間になる。だから、常に子供というのを意識の中に入れておくべきだと思いますね。

小沢剛（おざわ・つよし）

一九六五年東京生まれ。八九年東京藝術大学絵画科油画専攻卒業。九一年東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻修了。アジア・カルチュラル・カウンシルの招聘によりニューヨークに滞在。二〇〇二〜〇三年文化庁在外研修員としてニューヨークに滞在。〇七〜〇八年東京藝術大学非常勤講師、一〇年東京藝術大学、東京工業大学非常勤講師、一一年東京藝術大学、東京工業大学、武蔵野美術大学非常勤講師。

東京藝術大学在学中から、風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める《地蔵建立》開始。九三年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー《なすび画廊》や《相談芸術》を開始。九九年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》を制作。二〇〇一年より女性が野菜でできた武器を持つポートレート写真のシリーズ《ベジタブル・ウェポン》を制作。二〇〇四年に個展「同時に答える」として（森美術館）、〇九年に個展「透明ランナーは走りつづける」（広島市現代美術館）を開催。〇三年に「第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ」、〇六年「第5回アジア・パシフィックトリエンナーレ」二年「光州・ビエンナーレ2012」などに参加。二〇二二年より現職。

坂井千春（さかい・ちはる）

神奈川県横浜生まれ。

一九八四年東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。八六年ブリュッセル王立音楽院ブルミエ・プリ取得。八八年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程器楽専攻修了。八九年ブリュッセル王立音楽院ディプロム・シュペリエール取得。九〇年パリ・エコール・ノルマルコンサートイスト・ディプロム取得。二〇〇〇年〜〇四年ハミルトン大学非常勤講師、〇一年〜〇四年コルゲート大学非常勤講師。〇四年〜二二年京都市立芸術大学准教授。

マリアカナリス、ポルト、ロンドンの各国際コンクールで優勝。ロン・ティボー、エリザベート国際コンクール入賞。ポルト国際コンクールではドビュッシー賞、現代音楽最優秀演奏賞も受賞した。フィルハーモニア管弦楽団など内外のオーケストラと共演。欧米や日本各地で演奏。第二回出光賞受賞。リサイタル「フランス音楽の夕」で青山パロックスザール賞を受賞。二〇二二年から現職。